慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 日吉臺古墳發掘報告 |
| Sub Title | |
| Author | 柴田, 常惠(Shibata, Joe)<br>森, 貞成(Mori, Sadashige) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1932 |
| Jtitle | 史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.105- 114 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0105 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 日吉臺古墳發掘報告

柴田常惠

## 前記

我が慶應義塾年來の懸案たる移轉問題も漸く解決を見、近き將來に於て、東京南郊日吉の地に先づ一部の移轉が行はれる事と爲つたのであるが、其移轉敷地と爲つた地域は、神奈川縣橘樹郡日吉村、約十三万坪に亙る廣大なる面積を占むるもので、其中日吉臺と云はれて居る約九萬坪の地域は、それが日吉臺と呼ばるゝ事よりして、直ちに其處が臺地である事は容易に想像さるゝ所である。

之を實地に踏査して見るに、其土地は總體丘陵性に富んで居り、東北に當つて多摩川の流れがあり、景勝の風致に富んで居る事を知るのである。斯くの如き水を其近くに得られ、景勝の地勢に在る處は太古より人類の居住を許す可き條件を具へたものであり、人類が居住すれば、當然之に附隨して其生活關係乃至墳墓關係の所謂遺蹟が存在せねばならぬのである。

遠き原史時代より奈良朝末期迄に於て、特に原史時代に盛に築造された古墳——往昔の墳墓が今日殆ど全國的に其存在を發見されて居る事は既に喋々を要せぬ周知の事實である。特に武藏國の古墳分布に就て、從來の調査乃至踏査に依て明らかにされたものを數の上より大別して見ると、第一に多摩川の河口を主とした其流域附近が最も多く、第二が入間川に沿うた其本支流の地方、第三が利根川の川筋に當る武藏の北邊の部分と爲るのであるから、往昔多摩川流域に當る此日吉臺の地にも恐らくは人類の棲息があり、又同時に古墳の如きが築造された事は當然と考へられ、のみならず此多摩川筋方面に相當の居住民があつた事は、胸刺國造の根據地が此方面に比定されて居る事を以て其有力な徵證であるとせねばならぬのである。而して敷地に接する電車線路を中に挾んだ反對側の土地には道路工事の際などに、相當古い遺物、例へば原史時代の土器類、又は後世の武具類が掘出される事があると云ふのであるから、其地勢上より考へ合はせても、當然日吉臺には相當の豪族の營んだ墳墓が存在す可き筈であつて、豪族の居住を豫想せずとも何等か古墳の存在す可きは推想するに難くないのである。

果して實地踏査の結果、矢上一本松、矢上宮臺を始め他の二箇所に於て都合四個の古墳の存在を確かめ得たのである。此に於て矢上一本松所在の古墳を第一號古墳と假稱し逐次第二號、第三號（宮臺所在）第四號と便宜上是等に號番を附する事とした。

敷地内に於ける是等四個の古墳所在地は各々其存在條件をすべて具備して居り、大體丘陵の上部乃至脊梁に當る部分に在り、第一號古墳は東横線日吉驛軌條面を約三十米突として計測する場合、約四十二米突、第二號古墳は約四十米突、第三號古墳は稍々高くして約四十八米突、第四號古墳も約四十八米突乃至四十九米突の標高地點に所在し、殊に第一號古墳及第三號古墳は丘陵の脊に當る部分に夫々東、西、南の三方に展望を有して居り、就中第三號古墳は東方遙かに川崎市を距てゝ東京灣を望み得る景勝の地勢に位するのである。又略査した所に依ると、第一號古墳の附近に於て、其北方約一町及東方約三十間許りの地點並に其處より更に一町餘東方に於て、又第二號古墳の南方約四十間、第三號古墳の東南方約四十間の地點は夫々土器包含地として認める事が出來た。此外精査を以てすれば更に敷地内に於ても他の地點に必ずや此種の地域を發見し得る事は容易に想像せらるゝのである。

斯くの如く、敷地内の古墳に就ては種々の要件が得られたのであるが、然し其文化程度に就て見る時は、武藏國に



於ける文化は、先づ北方より開らけて其進程も亦此方面が殊に著しかつた事は、從來の古墳出土の埋藏品の價値に徵しても明らかな事實で、優秀品は主として北武藏方面より出土して居るのである。されば敷地内に存在す可く想定さるゝ古墳の價値は比較的期待するに乏しき憾みがある譯であるが、之は單に地理的に觀察したる所であつて、總て發掘の結果に俟つて實證的に檢討せねば何等明言する事は出來ないのである。されば事情の許す限りに於て之を發掘調査して見る事は寧ろ必要であつて、其結果の如何に依て敷地に或一つの新らたなる價値を與ふる事が出來得るならば、啻に發掘當事者の幸福とのみ爲すものではなく、延て我が慶應義塾の移轉す可き地域の由緒とも爲り得るものであるが故に學校當局の諒解の下に、都合上第一號古墳、第三號古墳の二個を發掘する事としたのである。

第一圖Aを以て示せる第一號古墳は敷地内西北隅、即ち日吉村大字矢上字一本松四八五番の山林に在り、東横電鐵線日吉驛を東北に距る約二町の地點に當つて存在する。其地形を見るに、西方は十數間の畑地を經て崖と爲つて限られ、南方は廣く展開し見渡す畑地は盡く莓を以て埋まり、東方は臺地續きと爲つて居り、北方は約一町餘の畑地が續いて次第に低地へと傾斜して居る。恰も附近の臺地の頂邊に當る部分に在り、古墳としての存在條件は具備されて居

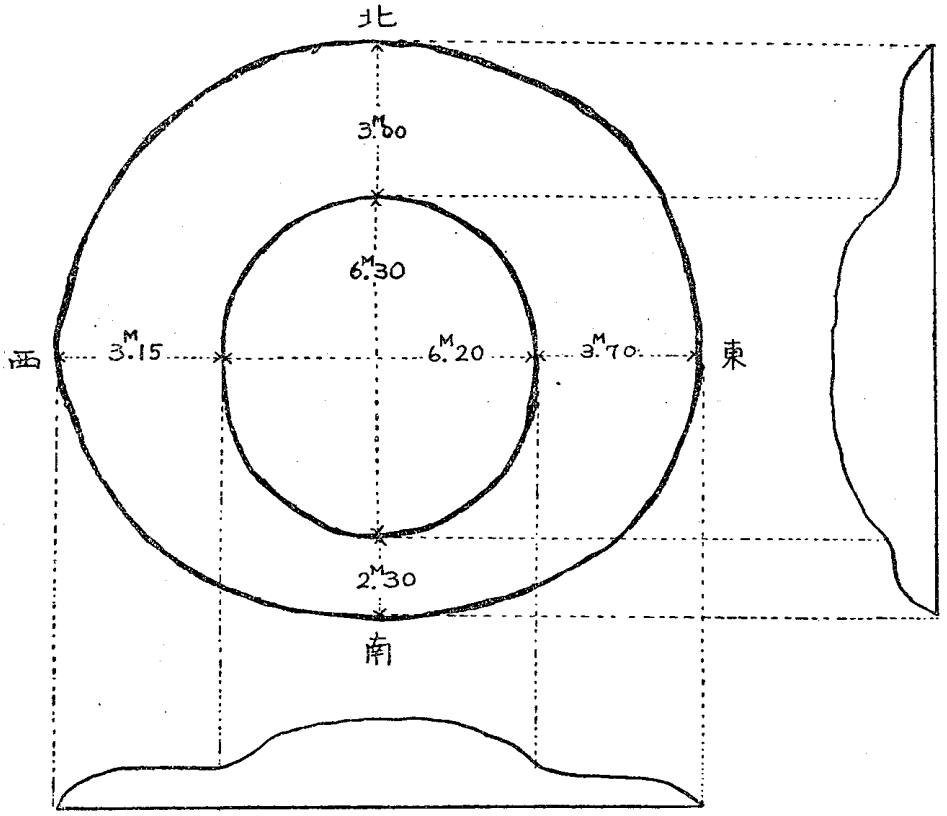
第一圖　日吉臺古墳所在圖

るのである。櫨或は棕櫚其他の雜木雜草が墳を蔽ふて繁茂して居る狀態は通例のものと何等變りは無い。而して南北西の三方の畑地及塚の極く附近には地表に土器の碎片が散亂して居り、少しく地表を探ると殆ど勞する事なく多數の土器片を拾ひ出す事が出來るのである。

古墳の種類は圓墳に屬し、然かも段墳である。其大さを略測したところによると、東西直徑十三米突五糎、南北直徑十一米突六十糎、地表上の總高一米突九十六糎、段の高さは東方に於て、地表上七十五糎、南方に於て一米突、西方に於て六十四糎、北方に於て六十五糎と爲つて居り、其幅は東方に於て中心より測つ

第二圖

第一号古墳、平面圖及側面圖




て三米突七十糎、南方に於て二米突三十糎、西方に於て三米突十五糎、北方に於て三米突と爲り、其上に恰かも折半せる圓球の一半を伏せたるが如き圓丘が載つて居るかの如き狀を呈して居るのであるが、其圓丘の東西直徑は六米突二十糎、南北直徑六米突三十糎で、段上に於ける高さは段の平均高を七十六糎とすれば、一米突二十糎と爲るのである。即ち段は東南に當つて稍々高く、西北の方面が稍々低く爲つて居り、其上に更に圓丘狀の盛土が施されて居るのである。（第二圖參照）

發掘は昭和六年五月三十一日、午前八時半より同日午後五時半迄及び六月七日の同時刻の二回に亙つて學生約三十名、人夫五名を以て行つた。

發掘方向は東方より墳の中心に向つて西方に執り、之が方向

に當る墳上の雜木、雜草は或ものは伐倒し、或ものは刈取り、幅員一米突を限度として掘進める事とした。深さは壗坿層に達するを以て限度としたが、現地表上九糎にして赤色の地肌を發見する事が出來たので之に隨て中央に向け掘進めて行つた。掘る事一米突餘にして早くも赤燒土器の碎片が相次で現はれ、其數は數十を以て算せられたが何づれも零碎なる小破片に止まり、纔かに土器たるの面目を見せて居るのみで、而かも埋藏狀態に一定の形式を認むる事は出來ず、砂礫同然に雜然混在して居るに過ぎないのである。其中に唯一個、高坏の脚に當る部分（凹部に於ける直徑約五糎のもの）が現はれたが、同じく赤燒土器たる以外には何等認む可きものではなかつた。

一方に於て環隍の有無を檢した處、東方に於ては墳の中心より五米突六十五糎の點に幅員一米突十五糎、深さ五十五糎のものを發見する事が出來た。土器片は此環隍內に最も多く現はれ、直徑十糎程のものも出土したが、環隍そのものゝ形狀は大體圓形の樣であつた。唯東北隅に於て或は方形を思はしむる如き疑問の形狀を呈するものがあつたが、六月七日の再調査に依て、此疑問は到底方形を證す可きものとはならなかつたのである。

附近には陪塚らしきものもなく、墳よりは土器の碎片以外に何等の出土品なく、更に此古墳に關する記錄乃至確實なる口傳も存在しない。然る時は此古墳に對する發掘の意義が失はれたる如く感ぜらるゝのであるが之に依て敎へらるゝ處の少なからざる價値が存在する事を知らねばならないのである。乃ち存在條件を具備して居る地點に立派に築造されたる此第一號古墳より何等の出土品なき一事は、必ずしも盜掘を意味するものでは無く、斯くの如き埋藏品を有せざる塚も嘗て築造されたる事實を物語るものである。其理由如何は容易に速斷を許さゞる所で、將來の研究に俟つ可き題目であるが、此事實の發見に依て、必ずしも塚の中に遺物が埋藏されて居るものとは限らない事を敎へられた譯である。發掘に費されたる勞力は或は徒勞の如く思はるゝのであるが、此勞力に依て初めて埋藏品なき古墳を發見し得たのであるから寧ろ之を貴重とせねばならないのである。

第三號古墳は第一圖Cに示せる如く、第一號古墳の東南方、宮臺一二四〇番の山林に在り、第一號古墳よりすれば、途中迂餘曲折の小徑によるの外なく、或は山合ひの濕地に降り、或は杉の林立する坂路を登つて初めて達し得るので、其間十町餘の距離がある。

古墳所在地は西方より南方にかけて最も廣く眺望を有して居り、四周に畑地が連なり、北方は相當の面積に亙つて樹木の繁茂著しく、且つ幾何ならずして急崖と爲つて居り、東、南、西に廣く展望が開らけて居る。恰かも附近に屹起する最高の丘陵の脊に當る臺地に所在するのである。

外見した所、東方より南方、西方にかけて畑地に隣接した周縁の部分が内側に向つて稍々殺がれて居るのであるが、之は恐らく耕作の都合上、何時となく鍬の爲に故意にはあらずとするも、自然に之を殺ぐ樣な事に爲つたものと思はれる。此爲に特に古墳の形態に甚しい異狀は認められないが、大きさの實測上に多少不便を感じた事は事實である。更に東方より北方に廻れば當然密生して居らねばならぬ雜木、雜草の類が稍々疎生狀態を呈して居り、又墳上に於ても中央より南面の部分が少しく窪んで居る爲、或は盜掘された事があるのではないかと疑はれもしたのであるが、之に就ては何等の確證なく、盜掘の事實は假想と爲す可きが至當の樣に思はれた。何分にも此古墳に關する記錄乃至口碑、傳說の如き何等の徵證と爲る可きものは遺されて居ないのであるから、果して盜掘の事實があつたにしても其判斷は發掘後の結果に俟たねば分明しないのである。此に於て盜掘の如何は一の疑問として姑く措き、先づ實地に踏査し、發掘して見ねばならなくなつたのである。

此第三號古墳は第一號古墳に比して、其周域に於て稍々其形を大にし、、高さも地表上二米突六十糎あり、東西の直徑十五米突四十糎、南北の直徑十三米突八十五糎と略測された。種類は第一號古墳と同じく圓墳に屬して居るが、之は有段ではなく、總體の形狀上よりして圓丘の勾配は第一號古墳の勾配より稍々急角度を爲して居る。而して墳上に櫨の類が繁茂して居るのを遠望すれば一の小山の如く、それと明瞭に指顧し得るのである。且つ古墳所在地點は遺物包含地として豫ての踏査に於て認められて居つたもので、近接する畑地などには土器の破片が相當に散亂して居るのを見受けた。

之に對する發掘は第一號古墳の再調査を兼ねて、同年六月七日、午前九時より午後六時迄、人夫八名、學生三十名許りを以て行う事とした。

發掘方向は正北より正南に執り、幅員二米突を以て進む事とした。雜木類の除去を行う事などは前回に同じ手段を以てしたが、愈々發掘に掛ると僅かに二米突の進程に於て既に墳の表面下四十五糎、地表上一米突二十糎の點に於て、直徑十七糎の埴輪の根の一片を發見する事が出來た。形狀は圓筒の下部の如く思はれたが斷片に止まつて其全貌を知るに由なかつたのであるが、埴輪の根である事は確實である。而して同一地點に相當數多くの砂利が混在して居た。此地點より愼重に發掘を續けて行く中、表面下二十糎足らずの點に於て間隔二米突の間に、第一號古墳出土のものより遙かに大形にして稍々厚手の土器の破片を總數約四十個餘も發見するに至つたが、土器の全形を現はせるものは殘念ながら一個も見出し得なかつた。土器に限らず、埴輪(但し殆どすべて圓筒に屬する)も其斷片を又數多く出土した。更に古墳中心點より二米突七十糎を北に距つて、表面下十

糎內外、古墳頂より見て三十六糎の地點に拳大の葺石を發見するに至つた。其數は僅かに五、六個に止まつたが、之は其所在地點より見て當然葺石である事は直ちに判定し得たのである。之と同時に又埴輪及土器の破片がかなりの數を以て混在して居る事を知つた。此點より更に一米突七十糎中央に寄つた點、卽ち中央より北方一米突の點に於ても、表面下三十六糎にして葺石を數個發見した。又中央を北に距る三米突內外の點よりは表面下十五糎許りの邊に絕へず土器片、埴輪質の斷片が出土して居つた。

斯くて表面に近く或は埴輪の根を發見し、或は葺石を見出し、斷片と爲つて混在するとは云へ數多くの土器及埴輪の一部を發見したる事に依て、專ら中央の狀態を知らんとするに急にして、深きに至らずして、距離の進捗を圖つた結果、中央部には早く到達し得たのであるが、出土物に於ては何等特例を認める事が出來なかつたので、試みに中央部の深鑿を行つて見ると、表面下一米突五十糎にして粘土質に遭遇したのである。粘土質は其形狀如何にもよるが、槨に用ひられて居るのが普通であるから先づ槨の一部に觸れた事に爲る譯である。依て愈々細心の注意を以て更に北に向つて逆行して深鑿を續けて見ると、中心を距る一米突二十六糎、表面下九十八糎の點に至つて直徑十五糎の石を發見した。之は葺石の一種とも見られ、或は槨を蔽ふものとも思はれたが、更に此點を下る事二十二糎餘の深さに至つて、卒然人夫の鍬にかなりの抵抗を及ぼす鐵類の如き固物の一部が觸れたのである。褐色を呈せる壚塊質の斷面に僅か六糎許りの黑色のものが見えて居るのみであつたが、之は明らかに刀劍の一部と判定する事を得たのである此點は中心を北に距る一米突二十糎、表面下一米突二十糎にして、正北を稍々西に偏した點に當つて居る。(第三圖參照)

此に於て從來の發掘態度を改めて、刀の所在を考慮して其周圍一米突平方以上の範圍に亙つて擴鑿せしめ、所在想定地點に近づくに及んで、人夫に代つて自ら竹篦を以て愼重發掘に從事したが、掘るに從つて遺物所在地點を稍々北に離れて東西に細長い粘土槨が明瞭に現はれ始め、其長さも一米突以上に及び、幅員十五糎の稍々完全なる槨を現出し得るに至つた。之より更に南方、遺物所在地點に向つて掘り進んだところ、此槨と平行して、十九糎を東南に距てて其黑色を呈せる遺物の全貌が現はれるに至つた。見れば果せる哉長さ一米突餘に及ぶ直刀であつた。

其位置は柄を東方に、鋩子を西方に向け、正東に對し二十糎を北に寄り、鋩子に於て正東を正北へ十度の角度を爲して橫はつて居たのである。全面腐蝕甚しく、一見した所では鞘など殆ど識別し難い程に爲つて居り、黑色の一片の棒切れが橫はつて居るに過ぎないと思はせた程である。此刀に就ての觀察は後說するとして、更に其周圍の狀態を見るに、刀の所在地點より南方五十二糎にして一帶の粘土質

に遭遇したが、之は刀より北方の粘土質が槨狀を爲して居るに反し、判然たる形狀を呈して居らず、其形を崩してしまつて居る。又刀の鋩子より西方十糎內外の一線に南北に長く粘土質があり、之と相對的に東方に一米突九十糎を距てゝ同じく南北に長き粘土質が發見された。之に依て見るに、長さ一米突九十糎、幅七十一糎の槨が發見された事と爲るのである。隨て刀は其槨內の北の面に近く東西に長く所在して居た譯である。

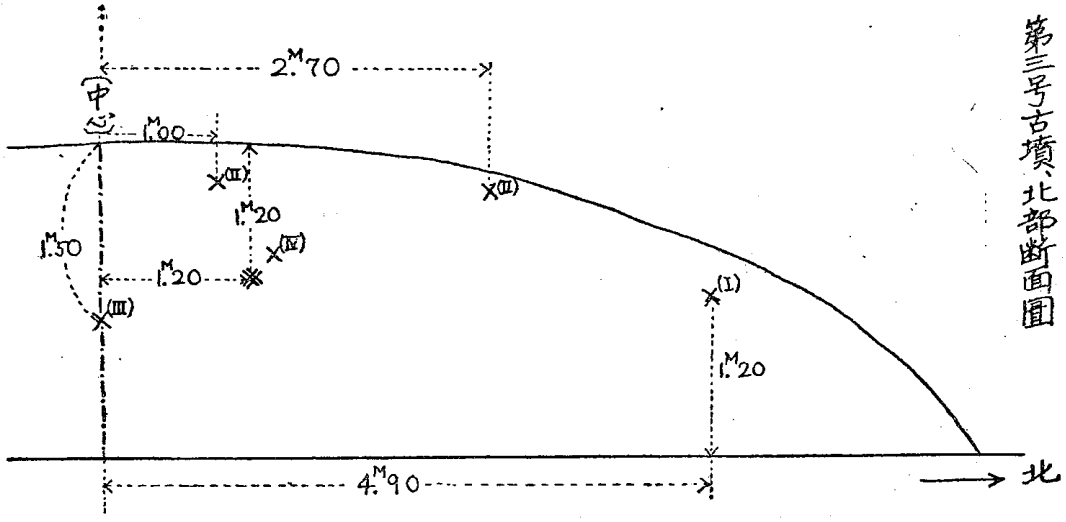
刀の發見に次で同樣副葬品の發掘に力めたのであるが、當然存在す可き玉の如きものすら如何に精査するとも遂に發見出來なかつた。之は聊か異とするに足るもので稍々諒解に苦しんだのであるが、此に於て盜掘の疑問を幾分濃くせねばならなくなつたのである。刀一個の發見のみに終つて何等の副葬品が他に一個だに發見出來ない事は十分疑問として殘さる可き問題と云はねばならぬと思ふ。

因に環隍は北方の周緣より九十糎にして、一米突十糎の幅員あるものを發見したが、一重環隍にして且つ圓形を呈して居り、之には特に注目す可き點はなかつたのである。

〔第三圖〕

直刀所在圖

第三号古墳、北部斷面圖



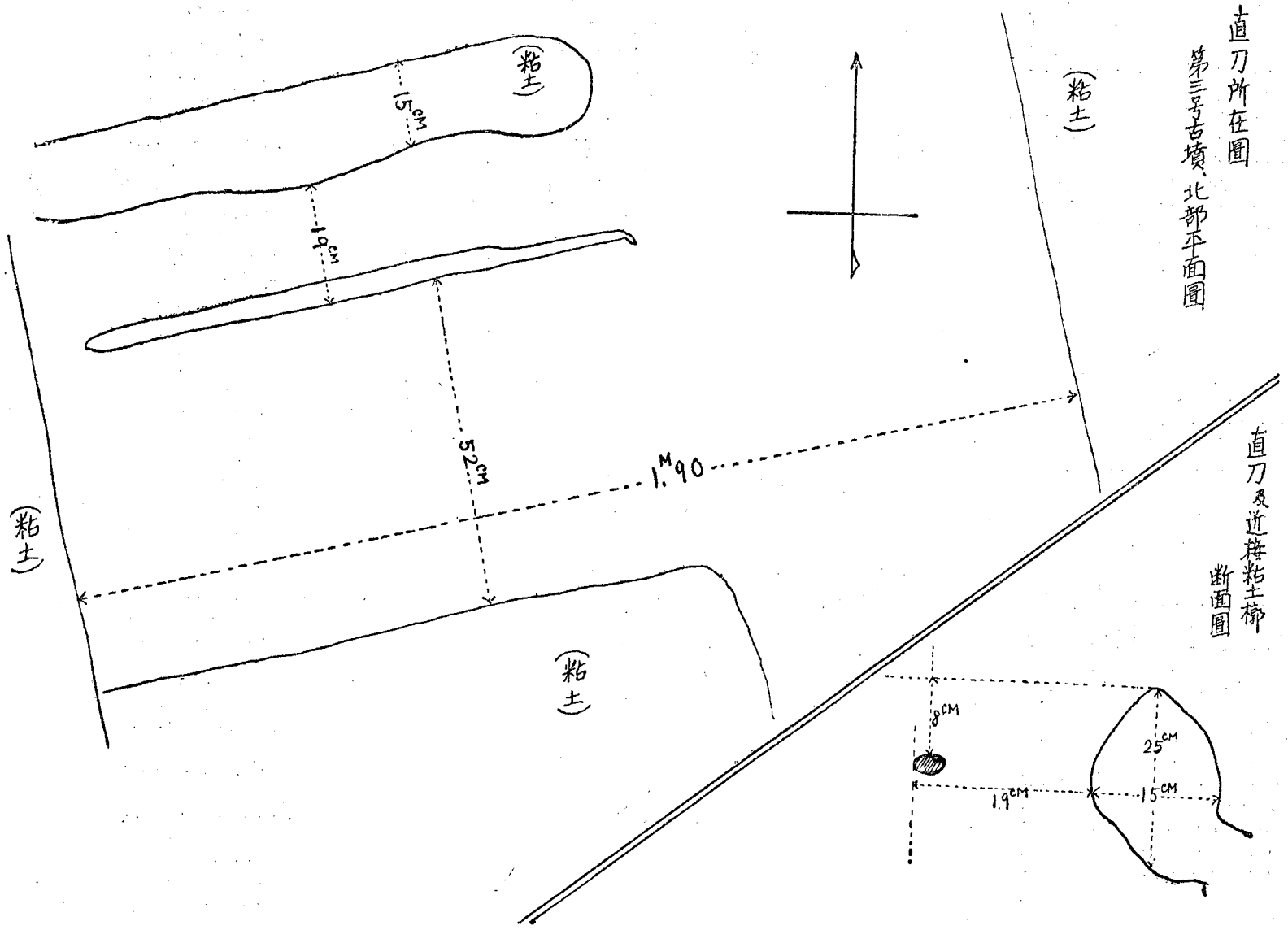

(I) 埴輪ノ根
(II) 葺　石（表面下36CM）
(III) 粘土質
(IV) 石（表面下98CM）
※ 直　刀

偖、刀の所在點を更に少しく詳細ならしむれば（第四圖參照）刀の北側の粘土槨は下部を十糎內側に殺いで居り、中央が膨らみ、上部が又削られて凸狀を呈して居る。其中央部南側より刀の南側の端まで十九糎、粘土槨頂點より測つて八糎下に刀が所在したのである。粘土槨の現出せる部分は二十五糎、幅員十五糎であるが、他の三方の槨は形

第四圖

直刀所在圖

第三号古墳、北部平面圖



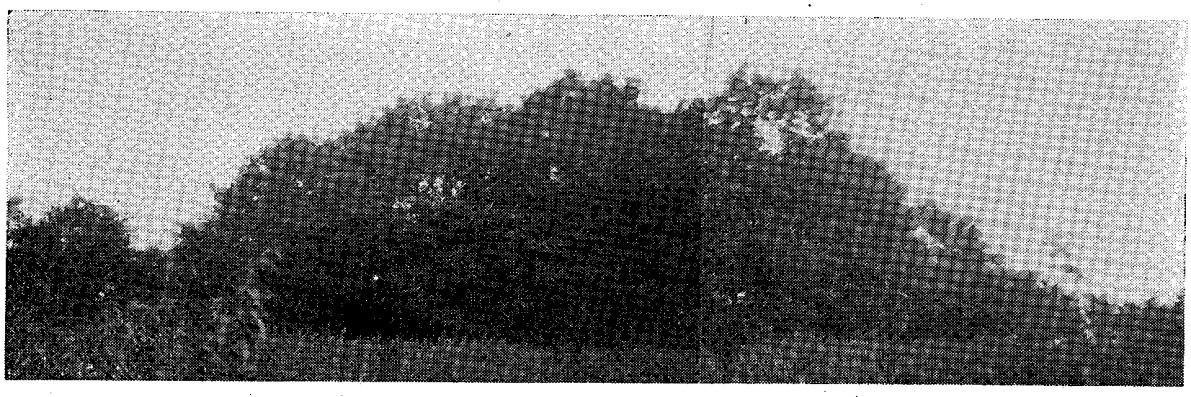

直刀及近接粘土層

断面圖

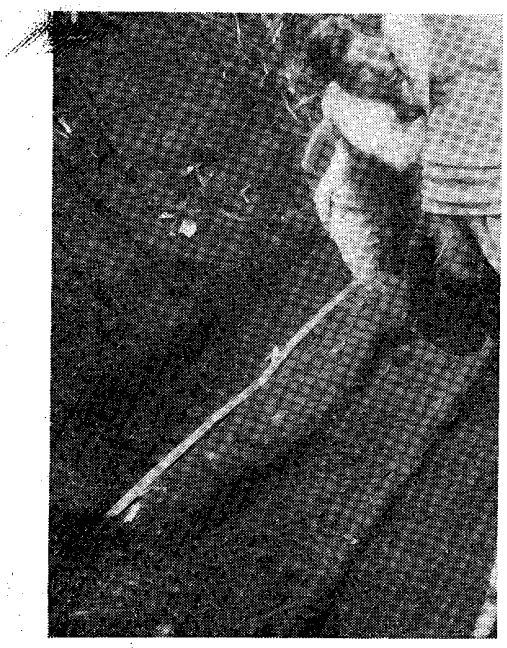
## 第五圖　日吉臺古墳全景及發掘圖

第三號古墳全景(南方ヨリ望ム)

第一號古墳全景



第三號古墳全景



第三號古墳直刀出土狀態

第三號古墳發掘作業

狀も判然しないし、人夫の鍬によつてかなり崩された爲、確實なる測量も出來なかつた。

以下、刀に就て觀察を下す事にする。

種類　直刀

全長　一米突〇二糎

莖　二〇糎

身　八二糎

脊ノ厚サ　八粍

鋩子ノ厚サ

切尖ヨリ三糎ニシテ　七粍

切尖ヨリ一糎五粍ニシテ　五粍

刀身　平作リ

關　幅九粍

鎺本ノ孔　關ヨリ三糎三粍

目釘孔　關ヨリ八糎二粍

〔拵〕

柄　絲卷柄

柄頭　判然セザルモ先端ハ五糎餘ノ突起狀ヲ呈ス

幅　一糎九粍

關ヨリ十種ニシテ　二糎六粍

鐔ニ於テ　三糎七粍

厚サ　身ノ厚サト同ジ

鐔　現存セズ

鞘　用材、針葉樹（杉？）

責金物　纒カニ其位置ヲ認メ得

足金物　ナシ

鞘尻　纒カニ認メ得

之に依て見るに、總體の形狀は大體從來各地に於て出土して居る直刀と相似たものであるが、鐔が既に滅し去つて現存せず、柄が絲卷柄であつて、然かも刀身の作りが平作りである諸點は此直刀の特徵と見る可きものである。鐔の現存しないと云ふ事は之に用ひられた材料が或は皮の如きものであつたらしい事を想像せしむるものである。

之を要するに、第一號古墳並に第三號古墳は共に圓墳であつて、總體の規模が比較的小さく、遺物に乏しい事等が知られるのである。元來多摩川流域に於ける古墳は其北岸の方面に大形のものが多く、南岸の方面には概して小形のものが多いのであつて、前方後圓墳の如き古墳として優秀なる價値を有するものも北岸の方面には屢々見受けられるが、南岸の方面に於ては、餘り數多く見る事が出來ないのである。之は乃ち其時代の文化中心地が北岸の方面乃至それに近い部分に在つた事を意味するものであり、從て南岸の部分に當る此日吉臺方面は文化中心地を稍々遠く離れて居る事を示すものである。

從來多摩川沿岸に於ける古墳發掘に關する研究は、嘗て

加瀬に於けるものが試みられた以外には未だ組織的に行はれて居ないのであるから、隨て出土品に就ても明確に判斷する事は出來ないのである。然し遺物として特に祝部が少ない事が通例と爲つて居る樣であり、須惠造の如きも此方面には殆ど居住しなかつたらしく、須惠土器の出土は極めて少ないのである。現に今回の兩古墳出土の土器片に就て見ても殆どすべて赤燒土器に屬するものゝみであつて、祝部の出土は見られなかつたのである。之に依て、祝部を出土せざる事が此方面に於ける一の地方的特徵であると爲し得る事と爲るのである。

偖、第一號古墳と第三號古墳を比較して見るに、兩者共に地理的條件より見て相似たる地點に所在し、形狀、大きさに於ても殆ど類型のものと看做し得るのであるから、兩者の間に著しい年代の差を想像する事は出來ないのである。但、歷年的には或は數年の距りがあるかも知れぬが、大體に於て同時代の古墳と看る事が出來やうと思ふ。さり乍ら兩者共に遺物の包藏が乏しい爲に年代考査は止むを得ず此乏しい材料に據るの外なき事情にあるから、正確には論じ得ないのであるが、玉類も出土して居らず、遺物の數も少ないのであるから、さのみ古い年代のものと爲す事は出來ない。然し乍ら、第三號古墳出土の直刀は、古墳時代のものとしては大形で立派なものであり、他の副葬品を伴出する古墳に包藏さるゝものに比して殆ど遜色なく、更に此第三號古墳よりは、樹物ではないが破片ながらも埴輪を出土して居るのであるから、之を古墳築造の末期に持來たす事も出來ないのである。

是等の諸點より推して見れば、第一號古墳並に第三號古墳は共に所謂古墳築造の盛行時代のものであつたらしく、多摩川流域に於ても其北岸に近き文化の中心地に於ては、前方後圓墳の如き優秀なるものが築造されつゝあつた時代に當るものゝ樣に考へられるのである。唯、此日吉臺地方は北邊の文化の中心より稍々遠く隔つて居つた爲に、後代見る可き程の遺蹟を殘さなかつたものであると云はねばならないのである。然し此方面に於ても、第一號古墳の如き包藏品なき古墳が發見さるゝのであるから、之に就ての研究も亦忽諸に附す可きものではなく、將來の研究題目は幾多存在す可きを思はしむるものがある。

斯くて、少くとも奈良朝以前に於て、慶應義塾の移轉敷地方面にも相當の居住民があつて、少數なりと雖も其遺物を今日に迄殘して居る事が確實に判明したのは、今回の發掘が單に學生の實地修學に資する所大なるものありしと同時に極めて有意義なるものであつた事を慶賀せねばならないのである。

最後に、此發掘に當つて諸方面より與へられたる厚意と便宜に對し、茲に深甚の謝意を表明する次第である。

（森貞成筆記）